



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

フランス語の半過去形と非完了アスペクト

著者	曾我 祐典
雑誌名	人文論究
巻	68
号	1
ページ	209-228
発行年	2018-05-20
URL	http://hdl.handle.net/10236/00026934

フランス語の半過去形と非完了アスペクト

曾 我 祐 典

0. はじめに

本稿であつかうアスペクトは、発話者（話し手・語り手）が事行についてとらえる展開の様相である⁽¹⁾。発話者が半過去形（以下、IMP）によって表すアスペクトについては、文法書や論考の多くが基本的に「未完了（展開中）」としつつ、そうでない例もあることを指摘する。たしかに、談話 *discours* でも語り *récit* でも（1）のような未完了の例が目立つ一方で、（2）のような未完了とは言えない例もかなり見られる⁽²⁾。

- （1）Elle a proposé aux garçons de sortir aux jardins de Belleville. Il *faisait* beau. Elle *avait* besoin de sortir.

（D. de Vigan, 2005, *Un soir de décembre*, JC Lattès, 137）

- （2）La réalité était tout autre et je ne l'*apprenais* qu'aujourd'hui : ils avaient décidé de se débarrasser de la fameuse lettre ; ils l'avaient brûlée. Ils m'avaient trahie.

（A. Martin-Lugand 2014, *Entre mes mains le bonheur se faufile*, Michel Lafon, 17）

-
- （1）語りの場合は、登場人物がとらえる展開の様相のこともある。動詞の単純形・複合形によって表すのが基本である。そのほかに、開始・続行・終了などの段階を表す手段として、不定詞を従える *commencer*, *continuer*, *finir* などの動詞がある。
- （2）本稿に示す発話例のうちで出典を記していないものは、インフォーマントの協力を得て作成したものである。インフォーマントは Olivier Birmann 氏（元関西学院大学）、Jean-Paul Honoré 氏（Université Paris-Est）、Adriana Rico-Yokoyama 氏（関西大学）の3名で、長時間の面談を通じて多くの示唆を得ることができた。

そこで、本稿では、IMP 使用にとって重要なのは、事行のアスペクトよりも、過去スペースにいる気持になっている発話者（ときに語りの登場人物）が事態をそこにあるととらえることであることを示したい⁽³⁾。

以下では、「完了」を定義して「非完了（完了でない）」が「未完了」と「総括」を含むことを確認し、IMP の基本的なはたらきについて仮説を提案する（1）。そして、総括アスペクトの事行を IMP で表すおもな場合について、事態のとらえかたがどのようなものであるかを検討する（2～4）。なお、本稿では、補足節や関係節などにおける IMP 使用は考察対象から除く。また、論述が煩雑になるのを避けるために、事行とそれを含む事態を厳密に区別しないことがある。

1. 基本的なアスペクト・テンス特性

ここでは、本稿における「完了」の使いかたを明らかにして「非完了」という用語を導入し、非完了が「未完了」と「総括」を含むことを確認する。そして、IMP の基本的なアスペクト・テンス特性について仮説を提案する。

1.1. 完了・非完了と未完了・総括

「完了」という用語は、西村（2014, 94）も指摘するように、（3a）と（3b）のどちらについても用いられるという不都合がある。

（3） a. 事行成立：事行が始めから終わりまで展開し、事行の全過程が実現すること

b. 事行成立ずみ：事行の展開が終わっている、全過程が実現している様相

しかし、本稿では、「完了」を（3b）の「事行成立ずみ」を指す用語として用いる。そして、「完了」でないアスペクトを「非完了」と言うことにする。

（3）「過去スペース」については 1.2. の冒頭で述べる。

完了アスペクトを複合過去形で表す例を示そう。

(4) Elle *a bu*. Elle ne peut pas conduire.

(5) Léa n'est pas là, elle *est sortie*.

発話者は、(4)では「酒を飲む」という事行の展開が終わっている(=酔っている)様相を、(5)では「出かける」という事行の展開が終わっている(=不在である)様相を、それぞれ表している。つまり、事行の全過程が実現済みであることを問題にしている。

非完了アスペクトには、未完了アスペクトのほかに総括アスペクトも含まれる⁽⁴⁾。未完了は、事行が展開の途中でまだ終わっていない様相である。それを表す発話者は、事行が実現の途中であることを問題にしている⁽⁵⁾。

総括は、事行の始まりから終わりまでの全展開が一つのかたまりになっている様相である。それを表す発話者は、事行が実現すること(実現そのもの)を問題にしている。次がその例である。

(6) Je suis fier de ma sœur. Non seulement elle *épouse* Jean-Luc Godard, mais elle est copine avec un leader révolutionnaire (...)

(A. Wiazemsky 2015, *Un an après*, Folio, 57)

(7) Ce samedi 11 mai, la France entière se *réveille* en état de choc et se *solidarise* avec les étudiants. (A. Wiazemsky, *Ibid*, 83)

(8) Viens, on *vide* les chambres et on *va* déjeuner.

(F. Vargas, *Quand sort la recluse*, Flammarion, 400)

(9) De 2005 à 2010, Elise *a enseigné* le français à Kyoto.

(10) C'est par une nuit noire aussi que je la *retrouvai* un an ou deux plus tard à Paris.

(F. Sagan 1984, *Avec mon meilleur souvenir*, Gallimard, 23)

(4) 「反復」は、個々の事行は総括アスペクトでもそれらの集まりが開かれていることから未完了の一種と見なすことができる。

(5) 未完了アスペクトと事行のタイプの関係については、高橋(2016)に興味深い指摘が見られる(pp.41-47)。紙面の制約のため、本稿では論じない。

(6) の発話者が問題にするのは映画監督 J.-L. G. と結婚した姉の「結婚する」という事行の実現そのものであり、(7) の発話者（ラジオのアナウンサー）が伝えるのは二つの事行の実現である。(8) の発話者は、相手（部下の刑事）とともにこれから行う二つの事行を現在すでに実現が確定していて現在の物事のありかたを左右する事行ととらえている。そして、現在において実現する事行として表して相手に迅速な行動を促している。(9) の発話者が過去方向を振り返ってとらえるのは、過去のある期間にわたる「教える」という事行の実現である。(10) の発話者が語りを進めるべく単純過去形で表すのは、語ることによって紡ぎ出す世界（語られる世界）の時間の流れのある時点における「再会する」という事行の実現である⁽⁶⁾。

現在形も単純過去形も完了を表すことはない。現在形は未完了だけでなく(6)－(8)のように総括も表し、単純過去形は(10)のように総括のみを表す。複合過去形は、(4)、(5)のように完了を表すこともあれば(完了用法)、(9)のように総括を表すこともある(先行用法)。一般に、非完了の場合、未完了の表現は動詞の単純形のみが担い、総括の表現は単純形と先行用法の複合形が担う。一方、完了の表現は複合形のみが担う。つまり、単純形は非完了(未完了と総括)を表し、複合形は完了(完了用法)と総括(先行用法)を表す。単純形と複合形のあいだのこのような役割分担は、現在分詞・不定法・接続法・直説法を通じて認められる。

1.2. 半過去形のはたらきに関する仮説

直説法の時制の主要なはたらきには、事態の大まかな時間的位置づけもある⁽⁷⁾。IMP が過去時制の一つとしてアスペクトとテンスの面で担うはたらきを考えよう。

(6) 単純過去形について「完了」を用いる研究者も少なくないが、本稿の用語法では「総括」が該当する。

(7) より精細な時間的位置づけは、状況補語（時間的副詞句や時況節など）によって行う。

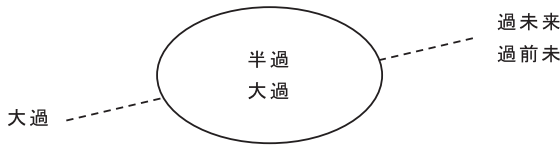


図1 過去スペースにかかわる4時制

発話者には発話時点を中心とする時間的広がり（現在スペース）にいるという意識があり、その意識を保ったまま、なんらかのきっかけで過去のある時間的広がり（過去スペース）を想起してそこにいる気持になることがあると考えられる⁽⁸⁾。過去スペースにいる気持になっている発話者がそこにある事態やその前または後の事態を表すときに用いる時制は、図1に示す半過去形・大過去形と過去未来形・過去前未来形の四つである。

使用実態の観察から、発話者は4時制を次のように使い分けられていると考えられる。すなわち、発話者は、過去スペースにいる気持になっている自分（ときに語りの登場人物）がそこにあるととらえる事態を表す場合、IMPを用いる。ただし、事行のアスペクトが完了であれば大過去形を用いる。過去スペースより前ととらえる事態（事行のアスペクトは総括）を表す場合も大過去形を用いる⁽⁹⁾。さらに、過去スペースにいる気持になっている自分（ときに語りの登場人物）が未来方向を展望して思い描く事態を表す場合、過去未来形（条件法現在）を用いる。ただし、事行のアスペクトが完了であれば過去前未来形（条件法過去）を用いる。過去未来のある時点より前ととらえる事態（事行のアスペクトは総括）を表す場合も過去前未来形を用いる。

1.1. で見たことを踏まえて発話者がどのような場合に事行をIMPで表す

- (8) 現在スペース・過去スペースの規模は、一瞬からほぼ永遠までさまざまである。また、過去スペースは、現在スペースにおいて回顧的に想起するものにかぎらない。たとえば、発話者（ときに語りの登場人物）がある過去スペースにいる気持になっているときに、それより前の過去スペースを想起することは珍しくない。また、稀なことだが、未来スペースにおいてそれより前の過去スペースを想起することもあると考えられる。
- (9) 大過去形には完了用法と先行用法（*Elle vivait seule. Elle avait divorcé l'année précédente.*）があることになる。

か、IMP にはどのようなアスペクト・テンス特性が認められるかを考えると、基本的なはたらきについて次のような仮説を提案することができる⁽¹⁰⁾。

(11) 半過去形のはたらきに関する仮説

- a. 表す事行のアスペクトは、非完了である。
- b. 表す事行を含む事態は、過去スペースにいる気持になっている発話者（ときに語りの登場人物）がそこにあるととらえる事態である。

(11 a) は、IMP 自体は未完了か総括かの区別に関して中立であることを意味する。どちらであるか、相手は動詞の表す事行のタイプ（持続型、完結型、状態型など）、文脈、共有知識などを手がかりに判断することになる。(12) と (13) を比べてみよう。

(12) Le vieillard *disait* quelque chose depuis un moment mais personne n'y faisait attention.

(13) “Tous ces petits cons qui croient faire la révolution”, *disait* l'un.
“On voit qu'ils n'ont pas fait la guerre d'Algérie.”, *disait* l'autre.
C'étaient les seules réponses qu'ils donnaient à Armand (...)

(A. Wiazemsky, *op. cit.*, 46)

(12) も (13) も「言う」という事行を含んでいる。ただし、(12) の事行は展開の途中で未完了アスペクトであるのに対して、(13) の事行はそれぞれ一度だけ実現した総括アスペクトである。どちらと解釈すべきかは、IMP が未完了か総括かを示さない以上、文脈その他から判断するほかない。

(11 b) の「そこにあるととらえる」のとらえかたには、視覚・聴覚などの感覚による、思考・想像による、他者から得た情報によるなど、さまざまなものがあると考えられる。また、(11 b) から、発話者が IMP を用いると、相手は表された事行を含む事態のある過去スペースにいてそこでその事態をとらえているような気持になると考えられる。

以下では、IMP が総括アスペクトを表す事例を、文法書や論考がよく取り

(10) 本稿の考えかたは、「二次的主体」を想定する大久保（2002）の考えかたに通じる点がある一方、未完了の時制とは見ないなど差異も多い。

上げるもの(2)とそれ以外のもの(3, 4)に分けて検討しよう。そして、IMP 使用にとって過去スペースにいる気持ちになって事態をそこにあるととらえることが重要であることを確かめよう。

2. 語りの半過去形

語りは、小さな事件についての単純で短い話もあれば歴史の叙述や小説といった複雑で長い文章もあり、実にさまざまである。語られる世界は、発話者(語り手)のいる世界(現在スペース)と断絶している。発話者は、原則として、あらかじめ結末までの全体の流れを把握している。そして、語られる世界の時間の流れに沿って次々に起こる出来事(事行のアスペクトは総括)を表すときに用いるのはたいてい単純過去形であり、出来事の背景描写や事情説明をするときに用いるのはたいてい IMP である。しかし、IMP の中には、語りに特有のものとして文法書や論考がよく取り上げる「語りの半過去形 *imparfait narratif*」もある⁽¹¹⁾。ここでは、おもな用法を二つ見ておこう。

2.1. 切断の半過去形

一つ目は、「切断の半過去形 *imparfait de rupture*」と呼ばれるものである。この用法については、時間的隔たりや突発性を示す状況補語を発話の冒頭に置く、動詞は完結型の事行を表すものにほぼかぎられる、などの特徴があるとされる。冒頭の状況補語は、直前に語られていた場面とは切り離して新たな過去スペースを導入し、そこで起こった出来事を話の結末か少なくとも場面の結末として提示するはたらきがあると言われる。例を二つ示そう。

(14) Je me secouai, outré de colère contre lui, je répondis sèchement :

“Je vous remercie, mais je crois que j’ai assez voyagé : il faut

(11) 語りの半過去形をどのようなものとするか、どのような用法を認めてどのような名称を用いるかなどは、研究者によって異なるようである。それについても本稿では論じない。

maintenant que je rentre en France.” Le surlendemain, je *prenais* le bateau pour Marseille.

(J.-P. Sartre, *La nausée*, 井元 2017, 113)

- (15) Tout ce qui le (=Adamsberg) rapprochait de l’arrestation d’Irène l’enfonçait dans de sombres parages. Une heure plus tard, l’avis de justice *parvenait* à la Brigade. (F. Vargas, *op.cit.*, 459)

これらの場合、発話者は、新たな過去スペースをそれぞれ *le surlendemain*, *une heure plus tard* で導入し、そこで起こった、「(船に) 乗る」、「届く」という事行を含む出来事を語っている。どの事行も総括アスペクトである。このような IMP についても、表す出来事が語りの「前景」を構成するところから単純過去形に相当すると言われる。ただし、単純過去形とちがって、一つの場面を締めくくる意味深い事態に立ち会っているような印象を与えるという表現効果が認められるとも言われる。

2.2. 絵画的半過去形

もう一つの用法は、しばしば「絵画的半過去形 *imparfait pittoresque*」と呼ばれるもので、頻繁に見られる。例を三つ示そう。

- (16) (...) elle *courait* à travers la ville pour chercher un seau d’eau. Quand elle *revenait*, à bout de souffle, Martin *buvait* longuement, à même le seau. (Le Clézio, *Mondo*, 183, 朝倉 2002, 257)

- (17) (...) Mais dans le taxi, comme Bernard se rapprochait d’elle, sa main *l’éloignait*, le *repoussait*.

(F. Mauriac, *Thérèse Desqueyroux*, Bres 2005, 73)

- (18) (...) que je me mis à répéter comme une démente que plus jamais je ne revivrais pareils moments, que je ne voulais plus entendre parler de barricades. Jean-Luc me *serrait* dans ses bras et me *jurait* que cela ne se reproduirait pas (...)

(A. Wiazemsky 2015, *op. cit.* 79)

発話者は、(16)の場合、ある過去スペースにおいて起こった出来事を語ったあと、次の過去スペースにおいて起こった二つの出来事を語っている。(17)の場合、ある過去スペースにおいて B. の振る舞いに対する反応として起こった二つの出来事を語っている。(18)の二つ目の発話の場合は、ある過去スペースにおいて連続して起こった二つの出来事を語っている。それらの出来事が含んでいるどの事行も総括アスペクトである。このような用法の IMP については、表す事態が出来事として語りの「前景」を構成するところから単純過去形の代わりをされていると言われる。ただし、単純過去形とちがって、相手（聞き手・読み手）の眼前で展開しているかのように事行をクローズアップする「絵画的」描写という表現効果があるとも言われる。

2.3. 表現効果の由来

(14)－(18)の事行はどれも総括アスペクトだから、それらを表すのに単純過去形も IMP も用いる。発話者は語られる世界の時間の流れの中に事行を位置づけて他の事行と並べようとする事が多く、その場合は単純過去形を用いる。

(14)－(18)の発話者は、意味深い結末や生彩ある描写という表現効果をあげようとしている。そのために、IMP を用いているのである。文法書や論考の中には、それらの表現効果を未完了アスペクトで説明しようとするものもあるが、(11 a) から分かるように IMP は未完了を表すと決まっているわけではない。だいいち、(14)－(18)の事行のアスペクトは総括である。さまざまな表現効果を IMP があげるのは、過去スペースにいる気持になっている発話者（ときに語りの登場人物）がそこにあるととらえる事態を表す時制だからだと説明すべきだろう。発話者がそのような時制である IMP を用いると、相手も発話者と同じ過去スペースにいる気持になって事態をごく近くにあるととらえるのである。

3. 評価対象の事態、直前の事態、これからの事態

発話者は、「初めてだった、～回目だった」といったコメントの対象として過去の事態を表すことがある。また、自分（ときに語りの登場人物）がある過去スペースにいる気持になっているときに、その直前に起こった事態またはやがて起こる事態を表すこともある。そのような場合に総括アスペクトの事行をIMPで表す事例を検討しよう。

3.1. 評価対象の *que* 節の事行

発話者は、過去のある事態 *P* について「*P* は初めてだった、～回目だった」といったことを〈*c'était la X^{ème} fois que P*〉の構文の発話によって表すことがある。そのとき、*que* 節にIMPを用いる例がよく見られる。

- (19) *C'était la première fois que je rencontrais quelqu'un d'aussi intéressé, de fasciné même, par mon train-train quotidien.*

(A. Gavalda 2017, *Fendre l'armure*, Le Dilettante, 24)

- (20) – *Salut, me dit-il en m'attirant dans ses bras.*

C'était la première fois qu'il avait ce genre de geste, je nichai mon visage dans son cou, en repoussant avec mon nez l'encolure de sa chemise, j'avais envie de sa peau et de son parfum.

(A. M. Martin-Lugand 2016, *Désolée je suis attendue*, Michel Lafon, 288)

- (21) *Or, c'était la troisième fois que je sortais mon laïus et il n'y avait toujours pas eu de dénégaration.*

(A. Nothomb 1999, *Stupeur et tremblements*, Albin Michel, 168)

- (22) *Nous avons décidé de partir le lendemain en fin de matinée. C'était donc la dernière fois que je m'agitais dans cette cuisine.*

(A. Gavalda 2002, *Je l'aimais*, Le Dilettante, 67)

発話者は、(19)では「(人に) 出会う」という事行を、(20)では「(そのような振る舞いを) 示す」という事行を、(21)では「(自分なりの弁明を) 持ち出す」という事行を、(22)では「(台所で) 立ち働く」という事行を、展開の途中という様相ではなく展開全体が一つのかたまりになっている様相においてとらえている。(20)の *avoir (ce genre de geste)* という状態型の事行も含め、どの事行のアスペクトも総括なのである。もしも過去にそれぞれの事行を含む *P* という出来事が起こったことを伝えたいのであれば、複合過去形または単純過去形を用いる単純な構文（たとえば(19)の場合、*J'ai rencontré...*または *Je rencontrai...*）で表すところである。

(19)–(22)の発話者は、それぞれの事態 *P* についての「初めてだ」, 「3回目だ」, 「最後だ」というコメントを伝えることに主眼をおいている。つまり、*P* はある種の評価の対象である。発話者は、それぞれの過去スペースにいる気持になっていて、評価と *P* をともにそこにある事態としてとらえるのである。つまり、(11b)に示したとらえかたに該当するので、評価 (*c'était la X^{ème} fois*) と同じように *P* の事行を *IMP* で表すのである。

3.2. 直前に実現した事行

発話者は、ある過去スペースにいる気持になっているときに、その直前に起こった出来事の事行を *IMP* で表すことがある。その例を二つ示そう。

- (23) Marion, j'ai un message pour toi. J'ai vu Giraudoux hier soir. Il *rentrait* d'un voyage en Suisse. Figure-toi que, de Genève, il a réussi à parler avec Jouvét qui est au Chili.

(Film de F. Truffaut 1980, *Le dernier métro*)

- (24) Un jour, il pleuvait, comme aujourd'hui. Le sac sous mon capuchon me faisait une bosse. Je suis passé devant une bande de jeunes ouvrières qui *sortaient* d'une usine. Elles ont couru derrière moi et elles m'ont arrêté pour toucher ma bosse.

(Film de F. Truffaut 1971 *Deux Anglaises et le continent*)

発話者は、(23)では発言前夜の「自分が G. に会った」という事態をきっかけに、(24)ではある雨の日の「自分が工場で働く娘たちの前を通った」という事態をきっかけにそれぞれ想起する過去スペースにいる気持になっている。そして、その過去スペースの直前に起こった「G. がスイス旅行から戻る」または「彼女たちが工場から出てくる」という事態 P を語っている。P が含む「(旅行から) 戻る」または「(工場から) 出てくる」という事行を、展開全体が一つのかたまりになっている様相、つまり総括アスペクトにおいてとらえている。

総括アスペクトの事行ということから考えられるのは、たとえば大過去形(先行用法)で表すことだが、1.1. に述べたように、過去スペースから振り返ってとらえるさらに前の出来事ということになる。(23), (24)の P は、発話者にとって、「自分が G. に会った」または「自分が工場で働く娘たちの前を通った」という事態のありかたを左右するだけ過去スペースに深くかかわっている点が重要である。過去スペースにいる気持になっている発話者は、P をそこにある事態のようにとらえているのである。そのとらえかたは (11 b) に該当し、IMP が適合する。

3.3. 実現が確定している事行

こんどは、ある過去スペースにいる気持になっているときに、やがて起こることととらえる事態の事行を IMP で表す場合である。例を二つ示そう。

(25) J'eus l'impression d'atterrir, j'étais en maillot de bain, et le travail reprenait. (A. M. Martin-Lugand 2016, *op. cit.*, 205)

(26) (...) avait-il (=Pierre) répondu. Puis, plein d'espoir : "Si ça se trouve, nous leur ferons supprimer le bac !" Pierre *passait* le sien dans un mois et demi. (A. Wiazemsky 2015, *op. cit.* 72)

発話者は、(25)では「私は水着姿だった」という事態を、(26)では「弟がバカロレアについて発言した」という事態をそれぞれきっかけに想起した過去スペースにいる気持になっている。そして、そこにおいてこれから起こる

「仕事が再開する」, 「弟がバカロレアを受験する」という事態 **P** ととらえる⁽¹²⁾。 **P** の「再開する」, 「受験する」という事行を, 展開全体が一つのかたまりになっている様相においてとらえる。

過去スペースにいる発話者が未来方向を展望して思い描く事態を「不確定」ととらえる場合は, 事行を過去未来形（条件法現在）で表す。しかし, (25), (26) では, **P** を「起こることが確定している」事態をとらえている。そして, **P** は発話者にとって, 「私は水着姿だった」または「弟がバカロレアについて発言した」という事態のありかたを左右するだけ過去スペースに深くかわっている。過去スペースにいる気持になっている発話者は, **P** をそこにある事態のようにとらえているのである。(11 b) に該当するとらえかたであり, **IMP** で表すことになる。

4. si 節と帰結節（主節）の半過去形

ここでは, 過去の現実の（または現実度が高い）事態 **P** と関連する事態 **Q** を表す場合と過去の反実仮定の帰結 **Q** を表す場合を取り上げる。そして, それぞれの場合に総括アスペクトの事行を **IMP** で表す事例を検討しよう。

4.1. si 節と主節

発話者は, 過去の現実の事態 **P** を **si** 節で表し, 対応する事態 **Q** を主節で表す場合に **IMP** を用いることがある。また, 過去の現実度が高い事態を条件として **si** 節で表し, その帰結を表す場合に **IMP** を用いることがある。

4.1.1. 事実用法の si 節と主節

さまざまな現実の事態のうちからなんらかの意味で問題をはらんでいる事態 **P** を **si** 節で取り上げ, それに対応する現実の事態 **Q** を表す主節をつづける

(12) (26) の発話者が〈dans 時間名詞〉の形式の状況補語を用いていることは, 発話者が過去スペースから事態 **P** の実現時点をとらえていることを示している。

「事実用法」と言われる表現法がある⁽¹³⁾。P、Qの事行は未完了アスペクトのこともあるが、次の例のように総括アスペクトのこともある。

(27) Ce jour-là, si elle *quittait* le bureau plus tard que d'habitude, son mari *rentrait* plus tôt pour préparer le dîner.

(28) Mais très vite, ils (=Rosier et Jean-Luc) furent d'accord sur l'importance du mouvement des étudiants et sur ce que cela laissait présager. Seul le vocabulaire les séparait. Si Rosier *disait* : "C'est passionnant!", Jean-Luc sur un ton de maître d'école la *reprenait* : "La question n'est pas que ce soit passionnant ou pas."

(A. Wiazemsky 2015, *op. cit.*, 35)

これらの場合、PもQも一度だけ起こった出来事であり、どちらの事行についても発話者は展開全体が一つのかたまりになっている様相をとらえている。出来事が起こったこと自体を重視する場合には複合過去形または単純過去形を用いることになる。しかし、発話者は、(27)ではある過去スペースの「彼女が普段より遅く退社する」というPと「彼女の夫がより早く帰宅する」というQを、(28)ではある過去スペースにおいて立ち会った対話を回想しつつ、「R.が『わくわくする』と言う」というPと「J.-L.が『わくわくする』かどうかなどどうでもいいと文句をつける」というQをそれぞれ対比している。「Pの内容はなんらかの意味で問題をはらんでいるが、Pのある過去スペースにはQの内容があるために問題は解消して物事は安定する（気持ちが安定する）」ということを伝えようとしているのである。(27)の発話者も(28)の発話者もそれぞれの過去スペースにいる気持ちになっていて、PとQをそこにある事態ととらえている。それは(11b)に該当する。PとQの事行をIMPで表すのは自然である。

(13) 事実用法の詳細については、曾我(2013)を参照。

4.1.2. 過去の現実度が高い条件と帰結

次は、現実度が高い（ありそうな）事態を条件として設定する *si* 節とそれに対応する帰結節において事行を **IMP** で表す事例である⁽¹⁴⁾。

(29) *Adrien et Jeanne, ce fut une autre paire de manches. Si je n'acceptais pas, ils menaçaient de tous débouler chez moi, tenant à me rappeler mon pari perdu des vacances.*

(A. M. Martin-Lugand 2016, *op. cit.*, 243)

発話者は語りの主要な登場人物でもあるが、**A.** と **J.** が誘ってくれている友人の集まりに行かないつもりでいる。そういう過去スペースにいる気持になっていて、そこで起こりそうな「自分が誘いを受け入れない」という事態 **P** を思い描いている。**P** が含んでいる「受け入れる（＋否定）」という事行は、全展開が一つのかたまりになっている様相で、実現が問題になっている。発話者は過去スペースにいる気持になっていて、**P** をそこにある事態であるかのようにとらえている。(11 b) に該当するために、事行を **IMP** で表すのである。

では、帰結節の **IMP** はどうか。発話者は、いまや **P** のある過去スペースにいる気持になっている。そして、そこに **P** の帰結として確かにある事態として「全員で私の家に押しかけると彼らが脅す」という事態 **Q** を思い描いている。**Q** が含んでいる「脅す」という事行は、全展開が一つのかたまりになっている様相で、実現が問題になっている。**Q** は、**P** のある過去スペースにいる気持になっている発話者にとって、そこにあるととらえる事態にはかならない。(11 b) に該当するために、事行を **IMP** で表すと説明できる。

4.2. 過去の反実の条件に対する帰結

最後に検討するのは、過去の反実の条件に対する帰結を表す **IMP** の事例である。帰結の事態が含む事行は、未完了アスペクトのこともあるが、総括アスペクトのことも珍しくない。条件を *si* 節で表す場合と「文頭語句」で示唆す

(14) この発話は自由間接話法である。直接話法であれば、*Si je n'accepte pas, ils menacent de tous débouler chez moi (...)* と現在形を用いる場面である。

る場合に分けて、事行を IMP で表す事例を見ていこう。

4.2.1. si 節で表す条件に対する帰結

まず、条件を si 節で表す場合の帰結節である⁽¹⁵⁾。過去の反実の条件に対する帰結を IMP で表す例を示そう。

(30) S'il y avait eu un baccalauréat au mois de juin, je le *ratais*.

(31) Si on avait eu le temps de bavarder avec Vivienne, elle vous en *parlait* mieux que moi.

(32) Si mes parents avaient été moins âgés, on *pouvait* dire que c'était le leur [= leur enfant].

これらの場合、発話者は、なんらかの過去の事態がある過去スペースにいる気持ちになっていて、その事態と両立しない反実の事態 P を思い描いている。P は、(30) では「バカロレアが6月にある」という事態、(31) では「V. とおしゃべりする時間がある」という事態、(32) では「両親がもっと若い」という事態である。発話者は、P を条件として表す。

そして発話者は、P のある反実 P スペースにいる気持ちになり、そこに P の帰結として確かにある事態 Q を思い描いている。Q は、(30) では「自分がバカロレアに失敗する」、(31) では「彼女が私よりうまくそれについてあなたに話す」、(32) では「両親の子どもだと言える」という事態である。それぞれの「失敗する」、「話す」、「言える」という事行については、実現を問題にし、展開全体が一つのかたまりになっている様相をとらえている。

4.2.2. 「文頭語句」で示唆する条件の帰結

こんどは、「文頭語句」によって示唆する過去の反実条件の帰結を表す「間一髪半過去形」である⁽¹⁶⁾。過去においてももう少しで現実になるところだった帰結の事態を「文頭語句+主節」の主節において IMP で表す用法である。

(15) 詳細については曾我 (2017) を参照。

(16) 「間一髪半過去形」については、曾我 (2018 予定) を参照。

その例を三つ示そう。

(33) Le conducteur a eu le réflexe de freiner. Une seconde plus tard,
l'autocar *rentrait* dans un arbre.

(34) Encore quelques jours à ce régime et elle *tombait* malade.

(35) Un peu plus et cette brute lui *déviissait* la tête !

(A. Wiazemsky 2007, *Jeune fille*, 153)

これらの場合、発話者は次のような操作をしていると考えられる。まず、ある過去の現実の事態（先行事態）**S** が意識にのぼっている⁽¹⁷⁾。**S** は、(33) では「ある時点でとっさに運転士はブレーキを踏んだ」、(34) では「ある日数、彼女は厳しいダイエットをした」、(35) では「荒々しくあの乱暴者が彼女をなぐった」という事態である⁽¹⁸⁾。発話者は、**S** のある過去スペースにいる気持ちになり、**S** に対するわずかな差異 **D** を含む反実の事態 **P** ($=S+D$) を思い描いて、**D** を文頭語句で表すことによってそれを示唆する。**P** は、(33) では「現実より 1 秒遅く運転士はブレーキを踏んだ」、(34) では「現実よりさらに数日多く彼女はそのダイエットをつづけた」、(35) では「現実より少しひどくあの乱暴者が彼女をなぐった」である。

そして発話者は、**P** のある反実 **P** スペースにいる気持ちになり、そこに **P** の帰結として確かにある事態 **Q** を思い描いている。**Q** は、(33) では「バスは木に突っ込んだ」、(34) では「彼女は病気になった」、(35) では「あの乱暴者が彼女の首をはずした」という事態であり、それぞれの「(木に) 突っ込む」、「(病気に) なる」、「(彼女の首を) はずす」という事行については、実現を問題にし、展開全体が一つのかたまりになっている様相をとらえている。

(17) 発話者は、「文頭語句＋主節」が **S** を踏まえた発話であることを相手が分かってくれると判断している。

(18) (35) の発話者は、映画の撮影に際して若い俳優に主役の少女を強く殴らせた監督に抗議するスタッフで、撮影中の事態 **S** を相手（監督）が当然分かっていると判断している。

4.2.3. 反実 P スペースにおける現実

(30)–(35) の Q の総括アスペクトの事行を、発話者は IMP で表している。Q は、過去の反実の条件に対する帰結として思い描いている事態であり、反実のはずである。しかし、IMP を用いているということは、発話者が Q を過去の現実の事態であるかのようにとらえていることを意味している。このことについて少し考えよう。

もとより、現在スペースにいる発話者は Q を反実ととらえている。そのようにとらえた事態として Q を表すことも多く、その場合は過去前未来形（条件法過去）を用いる。

(30)–(35) で表しているのは、反実の事態 P のあるスペースにいる気持になっている発話者のとらえかたである。実際、過去の反実の P を条件として si 節または文頭語句で設定した段階で、発話者は P のある「反実 P スペース」にいる気持になり、そこに P の帰結として確かにある Q を思い描くのである。発話者は、Q のモダリティを「確定」すなわち現実ととらえている。発話者にとって、Q は過去スペースにいる気持になってそこにあるととらえる事態にはかならない。(11 b) に該当し、IMP を用いることになるのである。

5. おわりに

本稿では、まず、発話者（話し手・語り手）がどのような場合に事行を IMP で表すか、IMP にはどのようなアスペクト・テンス特性が認められるかを考え、基本的なはたらきについて次の仮説を提案した。

(11) 半過去形のはたらきに関する仮説

- a. 表す事行のアスペクトは、非完了である。
- b. 表す事行を含む事態は、過去スペースにいる気持になっている発話者（ときに語りの登場人物）がそこにあるととらえる事態である。

(11 b) から、発話者が IMP を用いると、相手は IMP で表された事態のあ

る過去スペースにいてそこでその事態をとらえているような気持になると考えられる。

次に、総括アスペクトの事行を複合過去形（先行用法）または単純過去形ではなく IMP で表すおもな事例を検討した。2 では「語りの半過去形」の 2 用法を、3 と 4 では文法書や論考があつかっていないさまざまな事例を取りあげた。そして、IMP の使用が非完了アスペクトによってではなく（11 b）の特性によって説明できることを示した。すなわち、過去スペースに在る気持になっている発話者（ときに語りの登場人物）が事態をそこにあるととらえることが IMP の使用を促すことを明らかにした。

IMP のアスペクト特性については、しばしば現在形との類似が指摘される。現在形のはたらきがどのようなものであるかあらためて考えなくてはならない。また、IMP と複合過去形（先行用法）や単純過去形との使い分けをより明確にする必要もある。それらは今後の課題としたい。

主要参考文献

- Barbazan, M. (2005) *Le temps verbal, Dimensions linguistiques et psycholinguistiques*, Toulouse, PU du Mirail.
- Berthonneau, A.-M. & G. Kleiber (2006) Sur l'imparfait contrefactuel, *Travaux de linguistique* 53, Univ. de Strasbourg, 7-65.
- Bres, J. (2005) *L'imparfait dit narratif*, CNRS.
- 井元秀剛 (2017) 『中級フランス語 時制の謎を解く』, 白水社.
- Labeau, E. (2005) Mon nom est narratif : imparfait narratif, *Cahiers Chronos* 14, Rodopi, 79-102.
- Le Goffic, P. (1993) *Grammaire de la phrase française*, Paris, Hachette.
- 西村牧夫 (2014) 「事行成立と時制構造」『フランス語学の最前線』2, ひつじ書房, 89-135.
- 大久保伸子 (2002) 「切断の半過去について - *Huit jours plus tard, elle mourait...* -」『フランス語学研究』36, 14-29.
- 大久保伸子 (2007) 「フランス語の半過去の非完了性と非自立性について」『茨城大学文学部人文コミュニケーション学科論集』2, 19-39.
- Pougeoise, M. (1998) *Dictionnaire de grammaire et des difficultés grammaticales*, Armand Colin.

Riegel, M., J.-C. Pellat & R. Rioul (1994) *Grammaire méthodique du français*, PUF.

曾我祐典 (2013) 「フランス語の事実用法の〈si P〉」『人文論究』 62-4, 73-91.

曾我祐典 (2017) 「過去の反実帰結を表すフランス語の半過去形と過去前未来形」『人文論究』 67-1, 61-78.

曾我祐典 (2018 予定) 「問一髪の事態を表す『文頭語句+主節』」『フランス語学研究』 52, 日本フランス語学会.

高橋克欣 (2016) 『「こと」の認識「とき」の表現 フランス語の *quand* 節と半過去』, 京都大学学術出版会.

渡邊淳也 (2014) 『フランス語の時制とモダリティ』, 早美出版社.

Wilmet, M. (1997) *Grammaire critique du français*, Hachette.

——元文学部教授・名誉教授——